

教育現場の視察から見てきた教育のかたち

ーフィンランド、リトアニアの視察からー

趙 雪 梅
黒 木 哲 徳

Educational Forms Learning from Educational Sites in Finland and Lithuania

ZHAO Xuemei KUROGI Tetsunori

Key words : combined grade system small number of pupils per class classroom assistants flexible curriculum narrative learning

Abstract : Education in Finland has been the center of attention due to its consistently top performance in PISA assessments within 15 years. In this paper, after visit investigations for schools located in different area and workshop of narrative learning practice in Finland, eight main characteristics are listed and half of them is mainly discussed. Furthermore, by comparison between Japan and Finland on the educational environment, the pros and cons are considered from the characteristics which refer to the combined grade system, small number of pupils per class, several teachers as classroom assistants and the comfortable atmosphere in the classroom. In consequence, extra support can be carried out under a flexible curriculum suitable for a variety of children. Finally, it suggests that the dedication and the professional of Finnish teachers are the determinants of school education.

1. はじめに

フィンランドの教育が注目を浴びるようになったのは、PISA調査⁽¹⁾以降である。これまでのTIMSS⁽²⁾などの学力調査での上位は、どちらかというとアジアやヨーロッパ（東欧を含む）などの国々であった（ただし、PISA以降のフィンランドは、自信をつけたのか、TIMSSでも上位に来るようになった）。新たに始まったPISA調査といえども北欧のフィンランドがトップクラスに名を連ねるとは誰も予想できなかったのである。それゆえに、世界の教育関係者に与えた衝撃は大きかった。北欧型福祉の国としてフィンランドの名前が上がることはあっても、これらの国々が上位に来ることはなかった。というよりは、これらの国々では学力調査自体がそれほど大きな問題とされることはなかったとすら思える。従って、今回の事態は、この調査が従来型のものではないということを意味していると同時にいまや体制の違い

を越えて世界全体が21世紀に向けた新たな知の枠組みを構築すべく真剣に取り組んでいることの証左でもある。この衝撃は“フィンランド詣”という言葉を生むことともなった。多くの国の教育関係者が特別な教育をしているに違いないと考えて、フィンランドを調査訪問したのだが、教員養成の仕組みや教員という仕事への職業的価値の高さ以外にはあまりこれといった要因が見つかったわけではない。そのためか、PISA調査の問題の内容が問題だとする議論もある。確かに、この調査内容は学習したことの活用力や応用力に重点が置かれており、従来の学習の到達度をみただけのテストと異なっており、我が国の対象者にとっても不慣れな問題であったかもしれない。実際、我が国の教科書の問題に関する調査からも裏付けられるからである⁽³⁾。しかし、PISA調査は21世紀に必要な学習の能力の在り方についての提起であり、結果に一喜一憂する必要もないが、批判し

て済まされる問題でもない。それはここでの議論の主要なテーマではないので、別の機会に扱うこととする。

筆者らは、数年前にフィンランドの教育に関わってきた二人の研究者⁽⁴⁾と知り合うことができた。PISA調査の結果に刺激されたことは否めないが、彼らの教育方法の実践の場に参加しその方法を検討すること並びに少なからずPISA調査の結果の要因を探ることにも興味があった。幸いにも、一昨年と今年、その視察や調査並びにワークショップへ参加する機会を得た。特に今回の調査では、教育を取り巻く様々な環境や方法並びに制度に関しての新たな発見があった。

ここでは、独自の現地調査を踏まえて、フィンランドの教育の特徴を明らかにし、そこから得られる知見を検討することが目的である。

なお、カウンターパート二人の実践はフィンランドとリトアニアの二国にまたがっており、ここではリトアニアの教育についても一部触れることにする。

我々の調査は、次の四つに整理できる。

一つ目は、カウンターパートの提唱する教育方法である“ナラティブラーニング”⁽⁵⁾についてである。二回の調査でその実際に参加し、観察を行った。まだ、それに関しての評価ができるところには至っていないので、この小論ではその実践授業を報告するにとどめて、立ち入った解析はしない。

二つ目は、我が国で問題である“小1プロブレム”にみられる幼小連携教育の在り方についての知見を得るために、幼稚園教育を視察した。この点についても別の機会に譲る。

三つ目は、教員の養成の在り方である。これはすでに多くの識者により明らかにされている⁽⁷⁾ことでもあるのでここでは深くは触れない。

四つ目は、その設備やクラス環境や授業での子ども達の様子などからみた教育の特徴である。

特に、この小論では、最後の四つ目の観点を取り上げ、そこから得られる知見について検討する。

その理由について少し述べておきたい。

その国の教育の特徴について考えるといろいろ

な観点があるが、その指導方法や指導力はもちろんだが、それ以外の要素として、クラスのサイズ、環境、設備や子ども達の様子などが重要だと考える。それは、年齢の低い児童にとって、学校は初めての社会的な場であると同時に家庭の延長でもある。つまり、児童にとって、学校は学習する場であると同時に安心・安全に保護してもらえる役割をも担っている、そのことは教師の役割においてもいえることである。学習の指導者としては公的社会的であるが、低年齢の児童にとっては保護者的な部分を色濃く残しているともいえるからである。

その意味で、四つ目の観点は幼稚園、小学校の低学年においては十分に考慮されるべき重要な点であると考ええる。

2. 子ども達の授業の様子と観察結果

訪問してわかることは、フィンランドにしてもリトアニアにしても一つ一つの学校の規模が小さいという点である。フィンランドの人口は約540万人、リトアニアのそれは約298.3万人である（外務省の2012年各国地域情勢による）。二ヶ国を合わせても東京都の人口を下回る。土地の広さを考えれば、人口密度也非常に低い（フィンランド15.98、リトアニア49.55、日本338.5）、学校の規模が非常に小さいというのは当然の帰結でもある。

我々が訪問した小学校は、カウンターパートのナラティブ・ラーニングのプロジェクトを受け入れている小学校である。低学年のクラスを訪問したが、一つは1・2年生の複式の学級であり（A小学校ということにする）、もう一つは2・3年の複式の学級（B小学校とする）である。これらの小学校のクラスの授業の様子を述べ、そこから見えてくる教育の姿について述べる。

<A小学校>（フィンランド・ヒュヴィカー市、ヘルシンキから北へ列車で約1時間）

訪問時期：2012年9月

クラス：1年と2年の複式クラス

クラスの人数：12名

担任：女性（専門は数学）

ロケーション：両脇が林である大きな道路の少

し奥まったところにある。小さなマーケットや会社などがポツンと建っている広い空間（土地が広いので、それぞれがポツンとある感じ）にあり、学校は囲む塀などはなく、無造作にある平屋の建物が小学校で、そこに園庭と保育園と教会兼公民館が隣接して建っている。平屋で日本的のように広いグラウンドがあるいかにも学校といった造りではないので、学校とは気づかない。周りには、道路沿いには個人住宅や集合住宅があるが、林の中にもあるようだが、道路からはわかりにくい。この学校からヒュヴィカーの駅まで1時間あまり歩いたが（バスの便が悪い）、広い道路のわきは林が連なっており、途切れることはなく、人家もまばらしか見えなかった。

授業：1 限目算数、2 限目国語

1 限目の算数の授業は、ナラティブ・ラーニングではなく、普通の方法であった。

二桁と一桁の繰り上がりのある足し算で、日本では1年生でやる内容である。指導の方法は、指導書についているDVDを使いスクリーンに映った場面を説明するだけで、教具も用いないし、特別の授業でもない。先生が説明をしているときは、児童はスクリーンの前に集まってきて、床に適当に座って聞いている。時々、先生が書き込み式の本で対応するところを座ったままで説明する（図1）。それが終わったら机に帰って、書き込み式の教科書を見て書き込んだり、おさらいをする。



図1 フィンランドの小学校算数の授業風景

この算数の授業を受けている児童数は9人

で、このクラスには丸いテーブルが4つあるだけで、個人の机はない。

その他：算数の時間に、特別のクラスで授業を受けている発達障害を持った児童が2人いるとのことであった。次の時間になって、4人の子どもがランドセルを背負って入ってきた。この児童は1年生である。1限目は2年生の算数なので、1年生は2限目からの登校であった。

2限目の国語の授業は複式である。この授業は丸い机について授業を受けるが、2年生はペアになって音読をする。物語になっていて、それを交代しながら音読する。1年生は文字の練習である。ノートや書き込み式の教科書を使う。この授業では担任以外に二人の先生がついていた。

複式のやり方は日本と変わるわけではない。もちろん、1年生と2年生の学習の内容は違っており、担任以外の先生がそれぞれに対応する。なにせ、クラスの人数が少ないので、先生も生徒も大声を出す必要があまりないので静かである。

教室サイズと雰囲気：

(1) 1年生と2年生の人数でも13名なので、非常に小さい。クラスの入り口は一か所であり、前と後の片隅に先生用の机がある。クラスの後ろには、図書のコーナーがあり、ソファや人形などが置かれていて、全体的にアットホームな感じである。鉛筆などの教具もまとめて部屋に置かれており、筆箱は持っているが、足りない場合はそれを使う。個人用机がないせいか、学校のクラスというよりは、家庭的な雰囲気である。今回の算数の授業のように、床に座ることは頻繁にあるようだが、好きな恰好で座っており、行儀がいいわけではない。文化の違いなのであろう。

(2) 2年生は1時間目の授業を受けるが、1年生は2時間目の授業から始まるので、2時間目に来ればよいということのようである。この点については、1週間に行う授業時間数の28時間を守ればよいので、指導内容や学年によって、1年、2年で一日の時数が揃っていないとのことであった。日本と比べてカリキュラムの組み方

が柔軟である。

＜B小学校のクラスの授業の様子＞（フィンランド・連邦制を実験しているカヌー県・県庁所在地カヤーニ市の田舎）

訪問時期：2010年9月

クラス形態：1、2年生の複式のクラスである。

クラス人数：2年生9人、1年生4人の13名

担任：女性（専門は音楽）

ロケーション：町はずれの林に囲まれた（日本的にみれば非常に辺鄙なところにある）小学校。林を切り開いた空間に小学校と保育園が隣接して作られている。建物は別々、保育園の遊び場は小学校の校庭を一部仕切って砂場が作っている。校庭も大きくはなく、後ろに林が広がっている。小学校とはわからない普通の平屋の小規模の建物である。保育園も昔のバスの駅舎を改装したものである。学校の周りは舗装も何もされていないし、塀も囲いもない。多分の子ども達の家もこの林の中に点在しているのだろうが、一見したところ近くにあるとは思えない。

授業：ナラティブ・ラーニング

ある物語に沿って行われ、一貫した主題はある。ストーリーは授業の進度により変化し、作られていく。子ども達のその時間の達成度や結果により、次の展開が決まる。

この日は、迷彩服をきて変装したご婦人（校長先生）が鳥かごを持って現れ（図2）、これまでの話の続きをして、その人が解決して欲しいという課題を残していく。そこには何らの奇妙な地図が残されて、これは何だということになった。どうも何かの秘密が隠されている場所に違いないということになって、その地図を頼



図2 フィンランドの小学校でのナラティブ・ラーニング授業の風景

りに、学校中を探索することになる。非常に小さい学校なので、部屋数も少ないのだが、その場所に文字や記号が隠されていて、それを子どもたちが集めてくる。それから記号と文字を解読していくという作業が始まる。

この授業は、次のようなことが狙いのなのだろうと推測した。これであれば、学年の違う複式でも可能である。

(1)地図などを見ながらその場所を捜し出すという、地図情報の解読とその場所に行けるかどうかの学習。

(2)集めて来た文字（アルファベット）を絵文字と組みわせてどんな意味のある文字ができるのかという国語の文字の学習。

教室サイズと雰囲気：

(1)1人机が二つずつ縦に3列、右端と左端に並んでいる。真ん中には、長椅子が3列位置かれている。ピアノも鉛筆や絵具などの教具もすべて教室にある。子どもの数が少ないこともあろうが、ゆったりと見える。窓は広く、手作りのカーテンがある。教室の後ろの片隅には、ソファや人形が置かれている。

(2)数クラスしかない小さい学校だからか、始業と終業のベルはならない。従って、いつ授業が終わり、いつ始まったのか外部者にはわからない。ナラティブの授業は、みんなで意見を出し合い、先生が黒板にそれを書くが、ノートをとるわけではない。いつこの授業が終わったかはわからなかったが、子ども達は一人また一人と校庭に出て行った。校庭は林に続いているが、そこに行く子はいない。追っかけっこをしたり、ブランコに乗ったり、ごっこ遊びをしていた。日本の子どもと変わらない遊びをしている。また、いつの間にか教室に戻ってきた。次の算数は授業なのか、各自が教科書兼ノート（書き込み式の教科書）で問題を読みながら解いていた。まだ、授業が始まった様子はなかったので、予習か宿題をやっていたのだろう。

以上が、フィンランドの視察した小学校の低学年の様子である。

A小学校はいま発展しつつある地区の小学校で

あり、B小学校は非常に田舎の小学校である。しかし、この二つの小学校には次のような共通した特徴が見られた。

- (a) 学級が複式であること
- (b) クラスの児童数が少ないこと
- (c) 教員が女性であること
- (d) 複数の先生が手伝うこと
- (e) 教室の雰囲気が和むように作られていること
- (f) 鉛筆や色鉛筆などの教具は学校に設備されていること
- (g) 教科書は書き込み式であること
- (h) 大きい声を出す必要がないこと

次章では、これらを踏まえてフィンランドと我が国の教育の違いについて考察する。

3. 教育環境の違いから見えてくること

ここでは、特に(a)と(d)を中心に検討する。

(a)に見るように、一般的にフィンランドでは複式学級が多いとのことである。それは、人口も人口密度も少ないことから一定の地域に住む子どもの絶対数が少ないことがある。しかし、学校を作るには1クラスの人数がある程度必要とのことである。これは行政サイドからすれば当然の要求であろうが、それでもこれらの小学校のように1クラス10名～20名の間である。その人数で学校を作れるというのは、我が国のように統廃合があたり前の流れであることから考えるならば、子どもたちの教育に手厚いということの証しともいえる。従って、B小学校のように全体としても非常に小さい学校も存在することになる。子ども達の側や保護者の側からすれば非常に恵まれた教育環境にあるといえる。しかも、教員の数が必ずしも少ないとも思えないのである。(d)のように、複数の教員が一つの授業に入っているのは頻繁のようである。この点は、同じ複式といっても児童一人当たりの教員数は日本に比べて多いと思われ、丁寧な対応がなされていると言えよう。上述の授業の様子から見る限りでは、教員自身が特別の授業スキルを持ち授業をやっているようには思えない。教員の養成制度からみれば教員のレベルは高いようである(6)が、この少ない事例からの判

断が難しいのだが、授業の目標とかまとめとかが丁寧であるという点で、我が国の授業の技能の方が優れているように思えた。一方、子どものおかれた教育環境（この場合はクラスの児童数と対応の教員数を指す）という点ではフィンランドの方が恵まれており、教育効果も大きいと思える。PISA調査において、フィンランドが上位なのは子どもたちの成績の上下の幅が小さいからだという分析がある。それはまさにこのような教育環境から生まれてくると考えることができる。

クラスの人数ということについて、リトアニアのことにも若干ふれておきたい。

筆者らが観察したリトアニアの小学校は複式ではなかった。リトアニアは、同じく人口が少ないといっても、林と湖沼の多い国とは違って平原である国であるから比較的人口密度が高い町や村を作って住んでいるという地理的条件の違いを反映していると思われる。しかし、共通することは、この国でも小学校の1クラスの児童の人数は、ほぼ20名前後のようである。この国の高校を訪問した時、数学の教員（女性）に高校のクラスの人数を尋ねられた。40名～50名という答えに、“そんな人数でどうやって教育をするのか”ととても信じられないという。彼女はいま30名の学級を持っており、これではとても教育はできないので、小さくしてくれるように要望しているとのことであった。裏を返せば、それだけ我が国の教員は腕がいいということになるのだろうが、加えてクラスサイズがこれらの国並みになれば、もっといい教育が実現できる可能性を秘めているともいえよう。

我が国もいま少子化で統廃合の流れが強まっている。少子化の流れは食い止めることは難しいとすれば、経済的効率のみでなく、子どもの教育という観点に立った検討が今こそ必要なのではないだろうか。

次に(e)について考えおきたい。

クラスの施設設備や雰囲気作りという点がこの視察を通して得た新たな発見であった。いま、幼稚園と小学校の連続性の問題を研究中であるが、数量的なものでは測れないクラスの持つ雰囲気が、冒頭にも触れたように低学年における教育に関しての重要な観点の一つの要因ではないかとい

うことに改めて気付かされた。もちろん、いまはまだ仮説に過ぎないが、低学年の児童たちが安心して過ごせる学校（とりわけクラス）ということを考えた場合に、この(e)と(a)が、子どもの学びに相乗的で有効な効果をもたらしていると考えられないだろうか。

どちらのクラスも居心地がよくて、自分の家にいるのと大きな変化を感じずに過ごせているのではないかということである。我が国の場合は、小学校というと低学年であろうと高学年であろうといかにも学校という雰囲気がする場所である。クラスにおいてすら、このような柔かい雰囲気があるとは必ずしもいえない。人数が多いとなればなおさらのことである。もちろん、我が国のクラスの作りには社会的な集団生活というそれなりの意味があり、一概に比較できるとは考えないが、フィンランドの二つの小学校のクラスの雰囲気からは張りつめた空気はなく、その学びを素直に内化できるような雰囲気が感じられた。つまり、年齢の低い子どもたちの学びと言う点で有効な効果が得られているのではないか。他人を意識せずに先生の話に集中できる雰囲気、居心地のよさでもいったらよいであろうか。低学年に子ども達の学びにおいて、クラスにあるソファや人形をはじめとしたクラス環境は、学びの重要な要素の一つではないかと考えた。

実は、我々が訪問したりトアニアの小学校ではもっと徹底した設計になっている。クラスの作りの間取りが、まるで家の間取りのようになっていたのである。つまり、家のように、トイレや居間（プレイルーム）などのもろもろの設備が教室を含めた形で整っている。もちろん、そのような設計しか知らない建築家が造ったのかも知れないのだが、結果的には、非常に居心地のよい空間であり、安心・安全の空間にもなっていることは確かである。

その間取りは脚注⁽⁷⁾に示した通りである。

このクラスでの授業はナラティブを取り入れた授業であった。その実際については脚注⁽⁸⁾に紹介しておくこととする。

4. おわりに

今回の調査から見えてフィンランドの教育の特徴の中から二つの点を取り上げて考察をした。

その一点は少人数でしかも複式と言うことであった。少人数教育は我が国でも取り入れられており、きめ細かな指導ができるという点で優れている。しかし、我が国の場合は35人学級が基本であり、必要に応じて習熟度別のようにさらに二つまたは三つのグループを形成するが、もともとの単位が小さいということではないので、クラス全体で考えたときの相互の効果が大きくなるのか疑問な点もある。

複式については、上級学年と下級学年の教え合いというのはそもそも人数が少ないので起きやすいということに加えて、フィンランドの場合は教員が複数対応することで低学年の子どもたちへの指導が行き届くということがある。また、カリキュラムの組み方に柔軟性があり、どちらか一方の学年の指導を徹底しなければならない教科については、時間差登校や時間差下校で対応できるという点は学ぶべきものがある。

従って、これから少子化を迎える我が国でもこれらを参考にして、小さい学校を維持しながら、カリキュラムの柔軟性を取り入れて行くことで、高い教育効果を期待できるのではないだろうか。また、少子化していく中で、クラスの雰囲気づくりについて、これらの国から学ぶべき点も多々ある。その観点を取り入れることで、低学年においての学びを高める一助になるということは大いにありうることだというのがここでの結論でもある。

3章でまとめたその他の特徴について取り上げることができなかったが、(c)について言うならば、訪問した小学校で男性の教員に会うことはなかった。多分に小学校の教員はほとんどが女性であろうと推測される。小学校では、我が国よりも女性教員比率が高いと推測される。その意味ではどの国でも同じような特徴の一つかも知れない。

書き込み式の教科書を用いるというのはエコの精神なのかどうかはわからない。ただ、フィンランドでは、学校とは教科の学習をするところという目的に限定されている。そのような環境におい

ては、書き込み式の教科書で十分なのかも知れない。中学校の授業も観察した。さすがに書き込み式ではなかったが、日本のように板書を写すというよりは、自分の計算の結果を書くといった作業的なノートである。この点については、これらの調査研究の課題である。

(h)については、確かに少人数ということがあるのだろうが、学校の目的と言うことと関連があるのかも知れないと考える。フィンランドではクラブ活動や掃除やクラス活動的な内容はすべて社会的な活動であり、教員もそれを指導する必要はない。従って、教員は午後の2時か3時位には帰宅できるという。自分の子どもと接する時間も教材研究する時間もたっぷりあるし、社会活動もできることになる⁽⁹⁾。先生に十分なゆとりがある。

最後に、PISA調査の結果が高いフィンランドの視察から言えることは、学習そのものの内容が我が国より高いということではなく、学習を成り立たせている要因に注目して考えるべきなのかも知れない。頑張っている教員が多いと思われる我が国の学校教育において、教員を取り巻く状況をしっかりと踏まえ、学習が成立する要因を改善することがいま求められているのではないかと強く考えさせられた。

脚注

(1) PISA調査(国立教育政策研究所のホームページより)

OECDが進めているPISA(Programme for International Student Assessment)と呼ばれる国際的な学習到達度に関する調査であり、義務教育修了段階の15歳児が持っている知識や技能を、実生活の様々な場面でどれだけ活用できるかをみるものである。特定の学校カリキュラムをどれだけ習得しているかをみるものではなく、思考プロセスの習得、概念の理解、及び各分野の様々な状況でそれらを生かす力を重視している。例えば、読解力の定義については、「自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考し、これに取り組む能力」となった。読解力はただ単に読む知識や技能があるというだ

けでなく、様々な目的のために読みを価値付けたり、用いたりする能力によっても構成されるという考え方から、「読みへの取り組み」(engaging with written texts)という要素が加えられた。つまり、読むことに対してモチベーション(動機付け)があり、読書に対する興味・関心があり、読書を楽しみと感じており、読む内容を精査したり、読書の社会的な側面に関わったり、読書を多面的にまた頻繁に行っているなどの情緒的、行動的特性を指すとされる。調査を4つのサイクルに分けて行い、第1サイクルの本調査を2000年、第2サイクルを2003年、第3サイクルを2006年、第4サイクルを2009年と、4回にわたり読解力、数学、理科の三分野を取り上げて本調査を実施している。2009年に65か国・地域(OECD加盟国34、非加盟国・地域31)、約47万人の生徒を対象に調査を実施した(表1)。なお、2000年調査には32か国(OECD加盟国28、非加盟国4)が、2003年調査には41か国・地域(OECD加盟国30、非加盟国・地域11)が、2006年調査には57か国・地域(OECD加盟国30、非加盟国・地域27)が参加した。

(2) TIMSS(Trends in International Mathematics and Science Study)

本調査は、国際教育到達度評価学会(IEA)が、児童生徒の算数・数学、理科の到達度を国際的な尺度によって測定し、児童生徒の学習環境等との関係を明らかにするために実施している。小学校は50か国・地域(約26万人)、中学校は42か国・地域(約24万人)が参加、我が国では、149校の小学校4年生約4400人、138校の中学校2年生約4400人が参加(平成23(2011)年3月に実施)。(以上、文科省ホームページより)学校教育で得た知識や技能がどの程度習得されているかを評価するものであり、調査目的は「初等中等教育段階における算数・数学及び理科の教育到達度(educational achievement)を国際的な尺度によって測定し、児童・生徒の環境条件等の諸要因との関係を参加国間におけるそれらの違いを利用して組織的に研究することにある」と定義されており、調査は4年毎に行われる。

TIMSSは学校で習う内容をどの程度習得して

順位	読解力	得点	前回の順位
1	上海	556	-
2	韓国	539	1
3	フィンランド	536	2
4	香港	533	3
5	シンガポール	526	-
6	カナダ	524	4
7	ニュージーランド	521	5
8	日本	520	15
9	オーストラリア	515	7
10	オランダ	508	11

順位	科学的応用力	得点	前回の順位
1	上海	600	-
2	フィンランド	562	-
3	香港	555	3
4	シンガポール	546	4
5	日本	543	1
6	韓国	541	2
7	ニュージーランド	536	9
8	カナダ	534	6
9	エストニア	529	10
10	オーストラリア	527	7

2009年のPISA調査の結果

順位	数学的応用力	得点	前回の順位
1	上海	600	-
2	シンガポール	562	-
3	香港	555	3
4	韓国	546	4
5	台湾	543	1
6	フィンランド	541	2
7	リヒテンシュタイン	536	9
8	スイス	534	6
9	日本	529	10
10	カナダ	527	7

2009年度は65カ国・地域が参加
＜OECD平均＞

- ・読解力:493
- ・数学的応用力:496
- ・科学的応用力:501

2006年度は57カ国・地域が参加

表1 2009年のPISA調査の結果

いるかを見るアチーブメント・テストであるのに対し、PISAは学校で習った知識や技能の活用能力を見るテストなのであるとされる。(以上、ウィキペディアより)

2007年

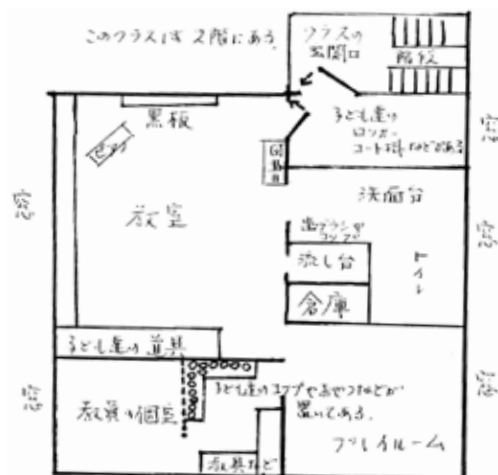
2011年

1. 香港	607	1. シンガポール	606
2. シンガポール	599	2. 韓国	605
3. 台湾	576	3. 香港	602
4. 日本	568	4. 台湾	591
5. カザフスタン	549	5. 日本	585
6. ロシア	544	6. 北アイルランド	562
7. イングランド	541	7. ベルギー	549
8. ラトビア	537	8. フィンランド	545
9. オランダ	535	9. イングランド	542
10. リトアニア	530	9. ロシア	542

表2 2007年・2011年におけるTIMSS調査の到達度

- (3) 田中 裕人・黒木哲徳著：「PISA 調査からみた算数・数学の教科書の調査研究 -PISA型の数学的リテラシー向上を目指す授業改善のために-」福井大学教育実践研究 (32), 7-15, 2008-01-31
- (4) ペンティエーハッカライネン氏（現在はリトアニア教育科学大学教授、元フィンランドオウル大学教授）。ミルダー・ブレデキウ氏（現在はリトアニア教育科学大学講師、元フィンランドオウル大学研究員）。二人のカウンターパートの導きにより、フィンランドの教育現場を視察し、いろんな角度からの議論を行うことができた。2011年には、都城市と本学部が共催する「第二回学力向上教育シンポジウム」のシンポジストとして出席していただいた。また、三股西小学校の教育研究会にも参加され、助言もいただいた。
- (5) Pentti Hakkarainen：「Narrative learning in the fifth dimension」 Paper presented at 11

- th EECERA conference. Alkmaar 29.8.~1.9.
2001 Preprint
Pentti Hakkarainen & Milda Bredikyute:
「Narrative teaching and learning」 Paper
presented at the conference “Challenges of
Innovative Education”. Vilnius 5.5~7.5.2005
(6) 増田ユリヤ著「教育立国フィンランド流教師
の育て方」岩波書店 2008
(7)



- (8)
<C小学校> (リトアニア・首都ヴィリニウス)
この学校は、一昨年訪問した小学校であり、東
日本大震災のお見舞いの鶴を送ってきた学校であ
る。その時に入学した児童が3年生になっていた。
リトアニアでは小学校は4年間である。次年度に
は卒業する児童たちであるからか、日本の同学年
と比べて幾分成長して見える。登・下校に際して
は、保護者が車で送迎する。

訪問時期：2012年9月（2010年9月にはじめて
訪問）

クラス形態：3年生のみ

クラス人数：28人

担任：女性（専門は音楽）

ロケーション：郊外のバス通りから少し林の中
に入った林に囲まれた小学校。

敷地は非常に狭い。校庭やグラウンド等は日本
の小さな学校の造りに似ている、校舎は3階建
である。

授業の様子：

1時限目：音楽の授業

どちらの授業もナラティブ・ラーニングの手
法を取り入れたものであった。

従って、市販の教科書ではなく、先生（女性）
がナラティブ用に作成したストーリーに沿って
行われた。彼女は音楽の専門家であるので、そ
のストーリーの一部を詩にし、彼女自身が作曲し
た歌について、コードや音程などの解説をしな
がら、ギターの演奏で歌うという流れであった。
我々にとっても歌いやすい、馴染みやすい曲に
仕上がっていた。

2時限目：算数の授業

これはなかなか工夫された興味を引く授業で
あった。自分の名前にアルファベット順の数字
を割り振る。全体の和を計算するが二桁以上に
なったらすべての桁の数字を足すことで最終的
には一桁の数字になる。その数字によって、ナ
ラティブの物語の人物が数字によって運命づ
けられており、その運命を調べる授業である。
実は物語の登場人物たちが、その運命で次の展
開があるという仕掛けになっているようだ。単
なる計算と違って飽きさせない仕組みになって
いた。数字は記号であるという意味では、桁の
数字を足して二桁になったまた足していくと
うのは、単なる計算問題より面白い。その複数回
の結果がある運命の宣言に繋がるので、その操
作の過程がいかにも運命を導き出しているよう
で子ども達には面白く取り組める。計算そのも
の練習をさせるよりは、このようなアイデアを
忍び込ませた工夫はうまいと感じた。我々の名



図3 折鶴を折って送ってくれたリトアニア小学
校3年生と再会

前も前の黒板に書くように言われ、授業に参加することとなった。ただ、別の時間にフォローするのも知れないのだが、まとめや途中の計算ミスのチェックなどはしないのが気になった。

(9) (6)に同じ

本稿の分担執筆は、1～3 趙雪梅、4 黒木である。文責は、それぞれにあるが、内容については、二人で議論しまとめている。